

事例

「教科と生活科をリンクして交流を」

— 松原市立布忍小学校 —

1. 実践の概要

(1) 「出会い・ふれ愛」の学校づくりをめざして

布忍小学校では、すべての子どもたちに確かな学力を保障することをめざして、一人ひとりが生き生きと参加できる授業づくりを進めている。

また、地域と結び、子どもの選択・参加・体験を取り入れた総合的な学習の時間の取組み「ぬのしょう、タウン・ワークス」や、豊かな心を育み、共感的な理解を大切にしたい集団づくりを進めている。



(2) 生活科「けん玉を作っていっしょに遊ぼう」

① ねらい（指導計画から一部抜粋）

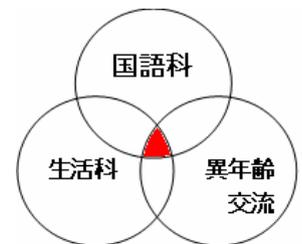
資料		
一緒にけん玉を作り、遊ぶ中で更にお互いの関係が近くなり仲良くなる。		
幼稚園	保育所	小学校(1年生)
グループの友達との久しぶりの再会を喜ぶ。お兄ちゃんやお姉ちゃんに優しく教えてもらい、一緒に遊ぶ中でお兄ちゃんお姉ちゃんと遊ぶ楽しさを感じる。		年下の子たちに分かりやすくけん玉の作り方を教えたり、みんなが楽しくけん玉で遊べるように考えて遊ぶことができる。

② 国語科と生活科の関連を図る

国語科では、「伝え合う力」として、自ら学んだことや考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度の育成が重視されている。言葉を媒介にして、互いの心を通じ合わせる能力の育成が求められている。

生活科においても、特に「身近な人々とのかかわり」が重視されている。人々とかかわることで自分を見つめることができるようになり、社会や人間関係上のルールを知って自立の基礎を養うことができるようになる。

国語科と生活科の有機的な関連を図ることにより、指導の効果を高めることができると考える。



③ 具体的な流れ・エピソード

グループピング

1年生と幼稚園・保育所の子どもたちが体育館に集合して、まずグループ編成を行った。幼保小それぞれ2名程度のグループを編成して一緒に活動した。このグループは2度目の活動になる。まず教員が1学期に事前の打合せ会を開き、子どもたちの性格などを考慮して班編成を行い、6月に一度ゲームをしたり、グループの名前を考えてワッペンを作ったりして一緒に活動している。

交流を始めた頃、交流の日に幼稚園へ行ったがらない子どもがいた。子どもたちが楽しめるように企画した交流を苦痛を感じる子どもがいたのである。そういう事実を知って話し合うことで、小学校の教員は幼児についての理解がさらに深まり、より丁寧な配慮を心がけるようになった。

心ほぐしゲーム

異年齢交流では、「互いの施設への招待」という形態が多く、招かれた方の教員は子どもの後ろで見守ることが多いが、この交流では違っていた。司会は初め幼稚園の教員が行い、子どもたちは「♪なべなべ底抜け♪」というゲームを楽しんだ。事前の打合せの時に、教員も一緒になって交流を楽しもうと決め、心ほぐしは幼稚園の教員、全体説明は小学校の教員と入念に役割分担していた。1年生にとっては懐かしい先生で、緊張もすぐにほぐれた。幼保小連携の成果の一つとして、小学校の教員が、子どもを惹きつける技術を幼稚園の教員から学べることもある。



けん玉づくり

1年生は初め、国語の時間に作った説明用ノートを見ながら緊張ぎみに説明を始めた。だが、少し時間がたつと手を取りながら優しく教え始める姿が見られるようになった。

けん玉遊び

作り終えたグループから、体育館いっぱい広がって、作ったけん玉で遊び始めた。園児たちは初め要領がつかめず難しそうだったので、1年生があちこちでその手を取って教え始めた。最後には一人でできる園児が増え、教えた小学生も、教えてもらった園児も、とても満足そうな表情が見られた。授業の終わりに今日の感想を発表しあった後、小学生がお見送りのゲートを作って園児たちを見送った。園児たちは「バイバイ」とうれしそうに帰っていった。

2. 連携のポイント

- 保育所や幼稚園の幼児は、日頃固定されがちになる人間関係を広げることができる。
- 1年生も「お兄ちゃん、お姉ちゃん」になって活躍でき、普段とは違った良さやがんばりが発揮できる。
- 学習したことを相手に伝えることを通じて、更に学習内容への理解が深まる。
- 年間を通して異年齢の同一グループによる活動を実施することによって、人間関係が深まる。
- ねらいを明確にした指導計画を相互に作成し、年間カリキュラムへ位置づけて実施している。

布忍小学校の先生へのインタビュー

「私達が時間をかけてでもやろうとしたこと」

これまで他校の先生方と連携の話をしていると、「打合せが大変」「時間がない」「そこまで出来ない」などという話をよく聞きました。わたしたちが時間をかけてでもやろうと思うのは、この取組みを通して、次のような新しい発見があるからです。

- 子どものことでいっぱい話ができ、「どんな子どもを育てていくのか」ということが具体的な子どもの姿を通じて一致できた。
- 各校園所のカリキュラム等の相互理解が進み、就学前でどのように育ってきたのか、それを小学校がどう受け継いでいくのかという視点を持つことが出来た。
- その結果、就学前から小学校への滑らかな移行ができ、1年生の学校生活への適応が早くなった。

交流のための打合せやその時間調整は確かに大変な面もありますが、それ以上に得るものは大きいと思います。子どもたちも私たちも毎日「元気に楽しく」過ごせています。みなさんいかがでしょうか。